平成 25 年度東京都子供読書フォーラム
実践報告発表

都立多摩図書館
「読み聞かせに関する
東京都子供読書活動推進資料」

都立多摩図書館　杉山　きく子

１はじめに

都立図書館には、港区にある中央図書館と立川市にある多摩図書館の２館が、ございます。２館で機能を分担して、都民及び都内の 62 自治体、約 400 館の公立図書館へのサービスを行っています。中央図書館は、都立図書館の中心館として、185 万冊の豊富な資料を所蔵し、調査研究機能を担っています。

一方多摩図書館は、雑誌を収集提供する「東京マガジンバンク」と児童・青少年資料サービスの二本柱で活動しております。

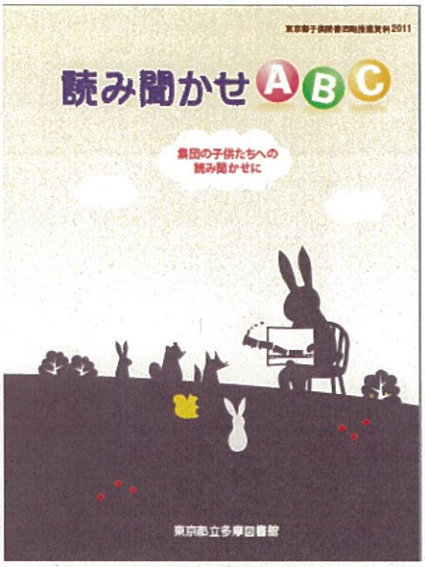
その二本柱の一つ、児童青少年資料サービスは、０歳から 18 歳までの子供たちの読書環境をよくするために、直接、間接に様々な活動を展開しています。

本日は、特に読み聞かせに関する「東京都子供読書活動推進資料」３点を中心にお話しいたします。

２『読み聞かせＡＢＣ』

今から 10 年ほど前から学校での読み聞かせが盛んになり、図書館では、先生や読み聞かせボランティアの方から相談を受けることが多くなりました。どのような絵本を読んだらよいか、子供たちが静かに聞いてくれないなど新しく取り組まれた方からのご質問もあれば、長年読み聞かせに携わっている方から、次の世代に知識や経験を伝えることが難しいといったご相談もいただきました。

そこで、平成 22 年に読み聞かせのブックリスト、『集団への読み聞かせにおすすめの絵本１』を、翌年には続編を作成し、館内で印刷し、配布をいたしました。この冊子は大変好評でしたので、平成 24 年度には、２冊をもとに『読み聞かせＡＢＣ　集団の子どもたちへの読み聞かせに』を作成しました。



『読み聞かせＡＢＣ』は、読み聞かせガイドと絵本のリストの二部構成になっています。「読み聞かせガイド」では、読み聞か

せにどのように取り組むか、その考え方や姿勢を記しています。項目をご紹介すると、「子供時代の読書は生涯にわたる宝となります。」「読み聞かせは読書への一番の近道です。」「本の力を信じ、子供が本を楽しむ力を信じるところから出発しましょう。」などとあります。

後半のリストでは、200 冊の絵本を紹介しています。創作絵本 120 冊、昔話絵本 50 冊、知識の絵本 30 冊を選び、詳しいあらすじ、読むときのポイントや子供たちの受け止め方、対象年齢、読み聞かせにかかる時間を記載しています。巻末には 328 種類の件名索引を設けています。

ここに取り上げた 200 冊のほとんどが、長い間子どもに愛読され、同時に大人にも支持されてきた絵本、いわば絵本の世界の半世紀にわたるベストセラーです。私たちはこの絵本から多くを学ぶことができます。１冊１冊読んでいくと、子供たちに喜びを与える絵本がどのようなものかがわかり、新しい絵本を読む際に、評価する「ものさし」を持つことができると思います。

『読み聞かせＡＢＣ』は、都内の全小学校に対して希望を募り、申し込みを頂いた学校へお送りしています。学校に備えておいて、先生方やボランティアの方たちに使っていただいています。個人で入手を希望する方も大勢いらしたので、現在は、都民情報ルームにて200円で頒布しております。紀伊国屋書店、三省堂、八重洲ブックセンターなどの書店でも購入することができます。会場に見本がございますので、ぜひ手に取ってみていただければと思います。

また『読み聞かせＡＢＣ』に掲載した絵本の展示やギャラリートークなどをしました。冊子を教科書にして、学校の先生やボランティアの方に読み聞かせ講座なども実施しております。

３『特別支援学校での読み聞かせ　都立多摩図書館の実践から』

２つ目は、『特別支援学校での読み聞かせ　都立多摩図書館の実践から』です。

都立多摩図書館では、平成17年から８年間にわたって都立特別支援学校でお話会をしてきました。幼稚部から高等部まで幅広い年齢にわたり、18校に対して、240回のお話会を行い、手探りでいろいろな絵本を読んできました。

この経験をもとに、子供たちが喜んだもの、読んで手ごたえを感じたものを選び、知的障害・肢体不自由、聴覚障害、視覚障害と障害別に95冊の本を紹介しています。

障害のあるなしに係わらず子供はみんな、絵本が大好きです。楽しみ方も同じです。『おおきなかぶ』では読み手の「うんとこしょどっこいしょ」の声に体をゆすったり、『ぐりとぐら』のカステラに、口をもぐもぐさせたりします。このように健常の子供たちと共通することもありますが、違うと感じることもたくさんあります。文章通りに読んだだけでは興味を見せない、絵本の楽しさを受け取れない子供もがたくさんいます。そんな子供たちには、読み手の側か

らの、もう一歩進んだ働きかけが必要です。読み聞かせのバリアフリーを図ると言ったらよいのでしょうか？

様々な工夫を重ね、私たちなりに学んだことを「特別支援学校での読み聞かせ　6つの手法」としてまとめました。

「寄り添って読む」「一部分を読む」「ダイジェストで読む」「読んだことを体験する」「クイズをしながら読む」「繰り返して読む」の６つです。

例えば「寄り添って読む」は

「障害の重い子供には、文章通りに読むのではなく、子供の気持ちに寄り添って語りかけます。食べものの絵本であれば「おいしそうだね」「どれを食べようか」、動物の絵本であれば「犬が寝ているね」「もうおきるかな」など１対１で呼びかけます」

これは文章通りに絵本を読み聞かせることを鉄則としてきた皆様方には抵抗のあることと思います。子供たちが本の世界に素直に入って楽しむには、本の通りに自然に読むのが一番です。でもそれでは楽しめない子供には、このように工夫をして読み聞かせ、まず絵本の楽しさを伝えることを優先させたいと思います。そして繰り返しているうちに、だんだん本の通りに読んでも楽しめるようにしていけたらよいのではないかと考えます。

「コッケモーモー！」　ジュリエッド・ダラスーコンテ 文
アリソン・パートレット 絵　たなかあきこ 訳
徳間書店　978-4-19-861450-8　★★

ある朝、オンドリは、夜が明けたことを告げようとして、「コッケモーモー！」と鳴いてしまいました。雌ウシたちに「モーモーはうしのなきごえよ」と言われ、次に「コッケガーガー！」と鳴いて、アヒルたちにおかしいと言われてしまいます。何度やっても正しく鳴けず、オンドリは悲しくなります。その晩、寝静まった頃、キツネがやってきます。目を覚ましたオンドリが、「コッケモーモー！コッケガーガー！コッケブーブー！コッケメーメー！」と鳴き声を上げると、キツネは逃げ出します。みんなが「きみってほんとにすごいなあ」とほめてくれました。うれしくなったオンドリは「コッケコッコー！」と鳴きました。

もう一つ健常の子供と違うことは、その反応が読み手の私たちにはなかなかつかめないことです。特に障害の重い子供については、先生方から多くのことを教えていただきました。子供から何の手ごたえも感じられず、楽しめたのかと不安になっている私たちに、先生方から「あの子はいつも疲れて寝てしまうけれど、今日は楽しそうに聞いていましたよ」などと教えていただきました。お話会の前後で先生といろいろ話し合い、打ち合わせをすることは特に大切だと実感しています。

私たちの現在の課題は、年齢の高い子供たちの読書です。生活経験があり、年齢相応の興味や関心を持つ知的障害、聴覚障害の子供たちが楽しめて、満足できる本を提供することが課題です。もっと実践を深め、研究していきたいと考えています。

また、今年度は、学校などに出向いて特別支援学級での読み聞かせについて講座を実施しています。今後も、直接、間接両面にわたり、特別支援の子供たちへの読み聞かせ活動を支援していく予定です。

『特別支援学校での読み聞かせ』は、本年度の初めに、都内の特別支援学校と特別支援学級のある小中学校に配布しました。

４　『読み聞かせに挑戦　中学生・高校生編』

３つ目は、『読み聞かせに挑戦　中学生・高校生編』についてです。数年前から、高校の保育や奉仕の教科で、生徒たちが幼稚園や保育園に出かけて、絵本の読み聞かせをするので、方法などを教えてほしいと言う依頼を受けるようになりました。高校生が初めて小さな子供たちに絵本を読んであげるのですから、ぜひ成功してほしい、聞き手の子供たちにとってもお兄さん、お姉さんと楽しいひとときを持ってほしいと思い、授業をやらせていただきました。

高校生に話をするのはとても新鮮な体験でした。初めて伺った教室は、床にはパンの袋が散らばっているし、机はあっちこっち向いているし、生徒たちはバラバラに座っている。どうなるかと心配しましたが、

絵本を読み始めると、それまで斜に構えていた生徒たちが素直に聞き入ってくれて驚きました。

あとから生徒の書いた感想を送ってくださいました。そこには、「高校生になって久しぶりに絵本を読み聞かせてもらったけど、小さい子になった気分で夢中になりました」とか「私も親になったら自分の子供に読み聞かせをしてあげたいです」など率直な気持ちが書かれていました。読み聞かせの輪が世代を超えてつながっていることを実感します。

この授業のレジメをまとめて、平成23年度に『読み聞かせに挑戦　中学生・高校生編』というパンフレットを作成しました。これを使って高校などへ出前授業をしたり、学校の求めに応じて差し上げたりしています。

5　最後に

最後に、『ソフィーの世界』を書いた作家のゴルデルの言葉※を紹介して終わりにしたいと思います。ゴルデルは、子どもの読書に関する講演の中で次のように言っています。

「子どもに食べさせ、着させた親が、次にする最も大事なことは、子どもに本を読んでやることだ」

この言葉をぜひとも実現させたいものです。

それには、

すべての子供が
小さい時も
大きくなっても
図書館でも
家庭でも
絵本の読み聞かせを楽しめるように、
皆さんお一人お一人の力が必要です。

ともに力をあわせていきましょう。

※都立多摩図書館作成の子供読書活動推進資料等は、都立図書館のホームページから見ることができます。

※「読者のいない世界のための本？」　ヨーンスタイン・ゴルデル　松岡享子訳
『こどもとしょかん』　99号　2003年